

いまむらしんとはっけん できごと ちゅうしんぶぶん
今村 信徒 発見 の 出来事 (中心 部分 のみ)

1867年・(慶応三年)の始めには、旧 筑後国 今村 で、キリシタンの一大集団
が発見された。そのきっかけとなったのは、浦上城の越の紺屋が藍を仕入
れるため、久留米地方に出かけて行ったことだった。たまたま今村にもキリ
シタンが潜っていると聞き知り、早速ローケイニユ神父(Laucaigne)に伝
えた。ローケイニユ神父は、中野の深堀徳三郎、土井の相川忠右衛門、上原
の原田作太郎の三人に、今村を調査するよう勧められた。三人は大いには
りきってこのすすめに応じ、もう一人、道上の深堀茂一を加えて都合四人、
2月23日、天主堂に行き、聖体を拝領した上で、喜び勇んで浦上を出発
した。肥前(今の佐賀県)の多良から船に乗って筑後の若津(今の大川市
の近く)へ渡り、陸路を経て、3日目の朝久留米の上手に当る府中につ
いた。



府中から今村は程近く、早くも午前中
に今村付近に着いた。茶店に寄って一
休みして路を聞くと、西目の今村か、
北目の今村かと尋ねるので、でたらめに
西目の今村と答えた。そして教えられた
まま茶店を出て歩きだした。たまたま

あいかわちゆう う えもん わらじ ひも と ひとり ひも むす なお
相川 忠 右衛門の草鞋の紐が解けた。一人だけおくれて紐を結び直してい
ると、^{ちやみせ}茶店に^{たちよ}立寄っていた一人が「^{ひとり}北目ならば、^{きため}藍もあれば^{あい}椎茸もある。^{しいたけ}西目
は^{こめ}米のほかに^{なにひと}何一つないのに、^{なん}何のために^ゆ行くのだろう」と^{はな}話し^だ出した。
するともう一人が「^{ひとり}いやあそこは^{へん}変な^{ところ}処でな、^{わかし}昔は^{しゅう}キリシタン^{いま}宗、^{ころ}今は^{しゅう}転
び^{しゅう}宗というのを^{ほう}奉じ、^た他^{そん}村と^{えん}縁の^{とりむす}取結びも^{はなし}しない^きそうだと話し^きした。聞
くともなしに^き聞いていた^{ちゆうう}忠右衛門は「^{えもん}さては^きよいことを^{いよいよ}聞きこんだ。愈々そ
れに^{ちが}違いない」と、^{はし}走って^{さんにん}三人に^{おい}追ついてこの^{はなし}話を^し知らせて、^{あいとも}相共^{よろこ}に喜ん
だ。

^{いまむら}やがて今村について^{ろぼう}路傍の^{いえ}家に入^{はい}った。^{たばこ}煙草の^ひ火を^{もら}貰い、そのついでに
^{はなし}話のいとぐちを^{もと}求めようと^{おも}思ったからだった。だが^るあいに^すく^ひと留守で、火の
^け気はあ^{だれ}ったが^{いえ}誰も^{なか}い^{みまわ}なかつた。家の中を見^{かみだ}廻したが、^{ぶつだん}神棚も^まなく、^{もんさつ}仏壇も^{たし}なく、^{いえ}門札^きさえも^まない。確かに^きキリシタンの^ま家らしい^ま気が^まする。しばらく^ま待っ
ても^{かえ}帰って^こ来ない。やがて^{ひるちか}昼近^{こみせ}くな^みった。小^{ひるめし}店を見^{たの}つけて^{ざしき}昼飯を^{ざしき}頼み、^{あが}座敷
に^{むら}上^{ひとびと}った。村の人々は^{ながさき}長崎から^{あや}怪^{おとこ}しい^{はい}男が^{おとこ}入り^{おんな}こんだというので、^{おんな}男も^{おんな}女
も^{ろうじん}老人も^{こども}子供も、^{おおぜい}大勢^{あつま}寄り集^きって^{ようす}来て、^{よにん}様子^{みせ}を^{しゅじん}うかが^{しゅじん}った。四人は^い店の^{おどろ}主人
に^い一夜の^{きようこう}宿を^{きよぜつ}頼んだ。主人は^{きよぜつ}驚いて^{きよぜつ}強硬に^{きよぜつ}拒絶した。

^{しゅじん}主人「^{はた}ここ^ご旅籠屋^やではない。^{はた}旅籠屋^やでないのに^{たびびと}旅人を^と泊めると、^{たびびと}旅人調
から^{とが}咎められても、^{もう}申し^{ひら}開^{でき}きが^{ふちゆう}出来^{やど}ない。府中^{ふちゆう}に^{ふちゆう}宿^{けいせい}らっしやれ。府中^{けいせい}には^{けいせい}傾城
(^{ゆうじよ}遊女の^い意味)も^い居^{ゆかい}れば^{ようじ}愉快も^あできる。そして^あ用事^あがあれば^あ明日^あ又^あお^あ出

になったら、いいじゃありませんか」。

よにん 「そう言わずに、泊めて下さいな。できぬとおっしゃるのに、強いてお願いするのは、ちと無理言うですけれども、それは、此処に懐かしいことがあるからです。ぜひ今夜は泊めて下さい。」

しゅじん 「いやできません。」

よにん 「そうおっしゃらず泊めて下さい。」

しゅじん 「どうしてもできません。」

と盛んに争って居る時、友次郎という人の姉で、本郷村の字古賀に縁付いている婦人が来合せた。

ふじん 「お前さん方はそんなに争って見たところで、とても解決できる話ではない。ぜひこの近付に泊りたいお望みならば、ちと遠方ですけれども、宅までお出で下さい。泊めてあげますから」

よにん 「どうぞそうして下さい」

よにん は非常に喜んで後からついて行くと、今村の端に、女で男の髪結いをしている一銭屋がある。名をおシマと呼び、元来は天草の生れで、今村の平田新吉と云う人の妻となって居た。友次郎の姉もおシマとはかねてからごく懇意の間柄であったと見えて、通りがかりに、ちょっと立寄った。

おっと 新吉は外出中でおシマ一人しか居ない。浦上の四人をじろじろ見

て、友次郎の姉に尋ねた。

シマ「何処のお方ですか」

友次郎の姉「長崎のお方で、宿を貸すものがなく困りぬいて居られたから宅へ案内するところです」

シマ「古賀は遠方ですよ。ここに泊まってはどうか。話があれば明日でも行かれますもの。旅人調が来る時は、私の兄弟ですと言っておきますさ。殊に宅は一銭屋ですから、いくらでも申開きはできます」とねんごろに言ってくれたので、そのまま厄介になることにした。時は午後の六時頃であった。

シマ「夕飯は炊きますか。」

四人「どうぞ。」

シマ「お菜は何にしませうか。鶏はどうですか。」

おシマもさるもの遠くから探りを入れた。なる程今村でも、いま悲しみ節をつとめているのだと四人は思った。

四人「いや、鶏は食べません。」

シマ「お好きではないのですか。」

四人「好かぬのではないが、今食べる時ではありませんから。」

シマ「そんなら卵はどうですか。」

四人「鶏も卵も一切食べません。食べてはならぬ時ですから。」

二人の婦人は、互いに顔を見せて、にっこり微笑んだ。四人は、この二人の婦人が、

いよいよ切支丹に間違いないと見てとったので、まだ内庭に立っている中に、コ

ンタツを一本づつ取出して二人に与え、座敷に上って遠慮なく、教の話^{おしえ はなし}を切り出した。すると二人も自分たちはキリシタンを奉じていると隠さずに打明けた。

今村の人たちは、浦上の四人が、おシマの一銭屋に泊ったと聞いて、好奇心にもえて大勢集って来た。おシマの狭い家は^{おおぜいあつま} 忍^{せま} ち人山^{いへ}に埋った。今こそと^{たちま} 深堀徳^{ひとやま} 三郎^{うま}たちは、老人^{いま}たちに、キリシタンの教^{ふかほりとく}を説明し始めた。

しかし老人たちは、あくまで何もわからない様子をする。「どうした教^{おしえ}で、どこから来たものかな」と尋ねるので、フランスの宣教師が伝えたキリスト教である、と御教の大要を説明したが、「変な教えでござるな、お経文^{きょうぶん}はありますか」と尋ねる。それで徳三郎は、「天^{てん}に存^ます」「ガラサ(天使祝詞)」「ケレド(使徒信経)」などの祈りを誦^{いの}えて見せたが、「妙^{みやう}なお経文^{きょうぶん}もあればあるものよ。」と、全然わからない様子をして見せる。

聖絵^{せいえ}や、聖像^{せいぞう}や、公教^{こうきょう} 図解^{ずかい}などを見せても、「わからぬ、わからぬ」と答^{こた}えるばかりでどうしても、自分達の信仰^{しんこう}をあらわさない。コンタツを取り出した徳三郎が、前もって手を洗わずにそれに触^ふれると、仏教的見地^{ぶつきょうてきけんち}から、「手を洗わずに珠数^{じゆず}に触^{さわ}って罰^{ばち}があたりませんか」と気もちを悪^{わる}くして見せた。

徳三郎は「ロザリオの珠^{たま}には魂^{たましい}は宿^{やど}っていない。手を洗わず触^{さわ}っても決して罰^{けつ}はあたらない。さあ皆さんも触^{さわ}ってごらんなさい」と差し出しても「いや触^{さわ}ると罰^{ばち}

が当ります」と言って老人たちは引揚げて行った。

今村の信者たちが、すぐに事実を打ち明けなかったのは、四人を隠密と
からである。然し、あとになっても、徳三郎たちは、そう云わなかった。

丁度慶応二年、幕府は第二回の長州征討軍を起こして失敗し、小倉藩兵の如きは長州勢に散々打ちのめされて、藩内におられず、九州各地に落ちのびて恐怖をまいていた時であった。浦上の四人が脇差をさして侍の姿をしていたため、小倉の浪人だと思ったからだ、と巧くお茶を濁したのである。おシマたち二人は軽々しく口走ったと云うので、老人達から散々叱られた。「こんな大事なことを、知らぬ旅人に打ち明けるといふことがあるか。女二人で今村を焦土にする積りか。あれを何と思っているか。長崎から来たなんて真赤なうそだ。実は隠密だぞ」と眼玉の飛出るほどきめつけられたのであった。

翌朝、四人は新屋敷に行くと、村の有志がずらり並んでいる。一夜静かに考えて疑念も晴れたものと見え、昨夜とはずいぶん様子が変っている。村の人は、「昨夜はあのよう申しましたけれども、実は我々もキリシタン宗門です。然し長崎近在に同宗門の人が潜んでいるということは初耳でしたし、多少躊躇するところがあって、直ちに打ち明けなかったのです」と話し出した。小店の主人も来た。自分が四人を泊めなかったのも、小倉藩の浪人と思ったからで、旅人調が来るなんて、それは口実に過ぎなかった。尤も若い娘たちも、ずいぶ

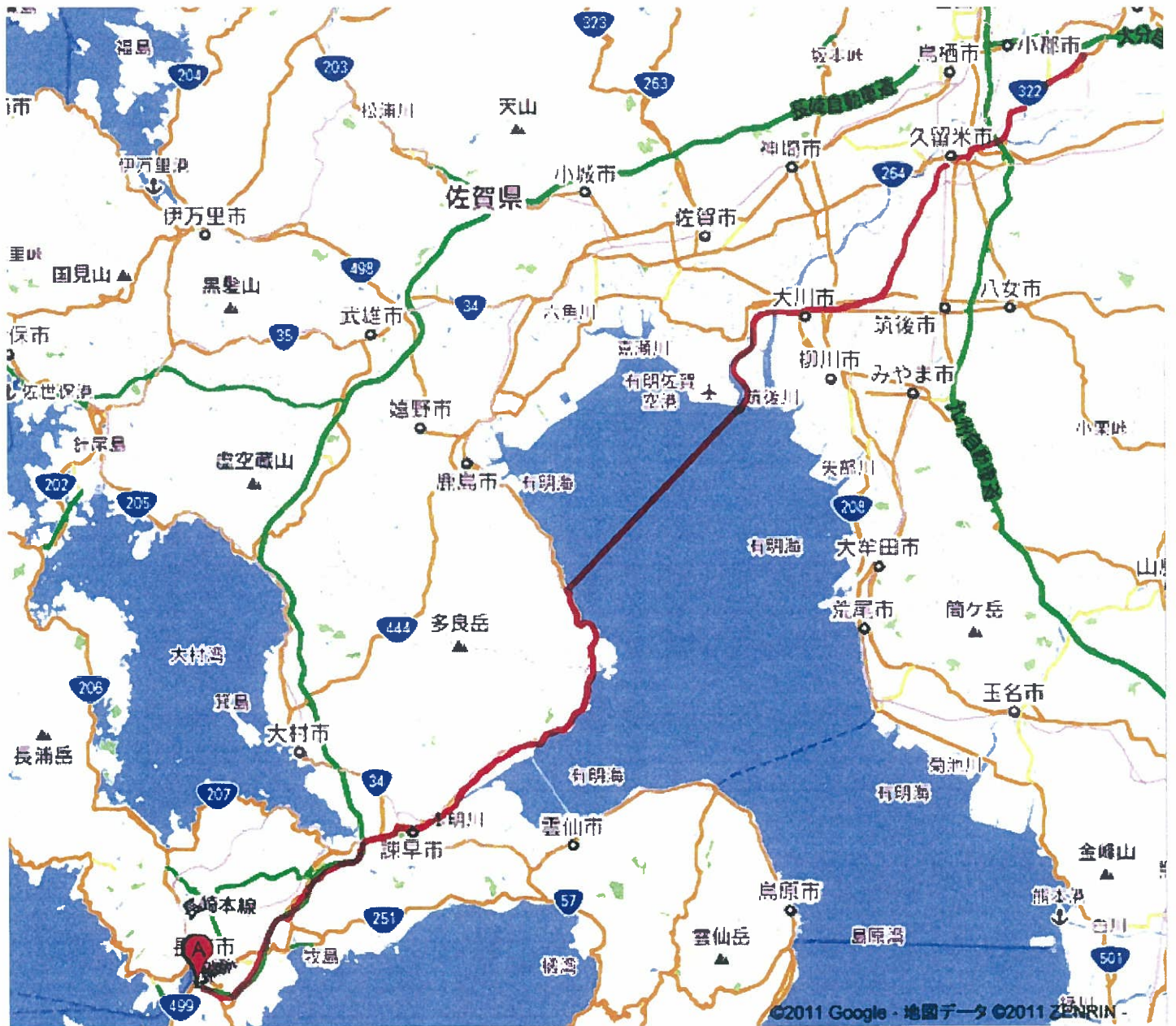
ん入^{はい}って来^きたのに、四^よ人^{にん}の眼^めが少^{すこ}しもそれ^{うつ}に移^{うつ}らなかつたので、只^{ただ}人^{ひと}ではあるま
いとは思^{おも}ったが、見^み極^{きわ}めがつか^{ことわ}なかつたので断^{ことわ}ったと打^{うち}明^あけ話^わをした。そこで徳^{とく}
三^{さぶ}郎^{ろう}は、浦^{うら}上^{かみ}の出来^{でき}事^{ごと}、ローマ^{せんきやうし}から宣^は教^{けん}師^しが派^{なが}遣^{さき}されて長^{うら}崎^{かみ}に來^して、浦^{うら}上^{かみ}にも忍^{しの}び
入^いったこと、浦^{うら}上^{かみ}の信^{しん}徒^とが熱^ね心^{しん}に聖^{せい}教^{きやう}を学^{まな}び、秘^ひ蹟^{せき}をうけ^つていることなどを告^つげ
て村^{むら}人^{びと}たちを驚^{おどろ}かした。

四^よ人^{にん}の色^{いろ}々^{いろ}な話^{はなし}が事^じ実^{じつ}であるか否^{いな}かを見^み届^{とど}けるため、今^{いま}村^{むら}から平^{ひら}田^た弥^や吉^{きち}と信^{しん}右^{うえ}
衛^{えい}門^{もん}の二^{ふた}人^{たり}を長^{なが}崎^{さき}へ遣^{つか}わすことにな^{しか}った。然^{しか}し信^{しん}右^{うえ}衛^{えい}門^{もん}はすぐに出^{しゅ}発^{つぱつ}できない
事^じ情^{じやう}があ^{とく}つたので、徳^{とく}三^{さぶ}郎^{ろう}は原^{はら}田^だ作^{さく}太^た郎^{ろう}一^{ひと}人^りを殘^{のこ}して、平^{ひら}田^た弥^や吉^{きち}は浦^{うら}上^{かみ}の三^{さん}人^{にん}と
四^よ人^{にん}連^{れん}づで、長^{なが}崎^{さき}に帰^{かえ}り、事^{こと}の次^し第^{だい}を天^{てん}主^{しゅ}堂^{どう}に行^いって報^{ほう}告^{こく}した。一^{いち}日^{にち}おくれ
て原^{はら}田^だ作^{さく}太^た郎^{ろう}は、平^{ひら}田^た信^{しん}右^{うえ}衛^{えい}門^{もん}と浦^{うら}上^{かみ}へ帰^{かえ}ったので、徳^{とく}三^{さぶ}郎^{ろう}は、今^{いま}村^{むら}のめづらしい
二^{ふた}人^{たり}の客^{きやく}を、中^{なか}野^のの实^{じつ}家^かにやすませた。浦^{うら}上^{かみ}の信^{しん}徒^とは、これ^まで全^まく知^しらな
か^{えん}ばう^{ぼう}のキ^{だい}リ^{ひやう}シ^{しゃ}タ^んの代^{ふた}表^り者^{てあつ}とい^あうので、二^{ふた}人^{たり}を厚^あくも^きてなした。後^あから來^き
た信^{しん}右^{うえ}衛^{えい}門^{もん}は、年^{とし}の頃^{ころ}五^ご十^{じゅう}才^{さい}ばかりの独^{どく}身^{しん}者^{しゃ}で、婦^ふ人^{にん}の煮^にた物^{もの}一^{いっ}切^{さい}、口^{くち}にせ^いず、祈^{いの}
り^{まい}を毎^{まい}日^{にち}の仕^し事^{ごと}にしているとい^ねう熱^ね心^{しん}家^かであ^あつた。

新^あた^らしいキ^{しゅ}リ^うシ^{だん}タ^んの集^は団^{けん}を発^{なが}見^{さき}して、長^お崎^おでは大^{しん}喜^ぶびであ^あつた。神^{しん}父^ぶたちは、
平^{ひら}田^た弥^や吉^{きち}と信^{しん}右^{うえ}衛^{えい}門^{もん}とから今^{いま}村^{むら}のキ^きリ^{やう}シ^みタ^ぶンにつ^{くわ}いて、興^じ味^{じやう}深^きい詳^きしい事^き情^きを聞^き
いた。当^{とう}時^じ今^{いま}村^{むら}にはキ^{やく}リ^{ひやく}シ^こタ^ん約^ふ百^{きん}戸^{にん}ばかり、付^ひ近^{やく}にも百^{ひやく}戸^こばかり、合^{ごう}計^{けい}二^に百^{ひやく}戸^この
キ^ひリ^そシ^{さん}タ^みンが、潜^{ひそ}んでいた。三^{さん}位^み一^{いつ}体^{たい}のデ^{しん}ウスを信^{しん}じ、ジ^{しん}エ^{しん}ズ^{しん}ス・キ^{しん}リ^{しん}ストを信^{しん}じ、

さだま び いっしょ あつま ごとん ま
定まった日には一緒に集って、ラテン語の「天に存す」「ガラサ」「キリエ・レソ
つうかい いの とな せいぼ ちじょう ろんじゅうさんもんかんせいかつ たま こと
ゾ」「痛悔の祈り」などを調える。聖母マリアが地上に六十三年間生活し給うた事
とうと ため ろくじゅうさんかい しゅうかん いっしょうがいふ ほん まも いっしん
を尊ぶ為に、ガラサを六十三回となえる習慣もある。一生涯不犯を守り、一身
いの ゆだ ふじん うらかみ どうよう みずかた き やく ちょうかた
を祈りに委ねる婦人もいた。また浦上のキリシタンと同様に、水方、聞き役、帳方
きょうかい やくしよく またぜんじゅつ またう えもん じゅんきょう
という教会の役職があったことなど、又前述したジョアン又右衛門の殉教な
かん いっさい い つた いまむら じょうきょう くわ
どに関する一切の言い伝えなど、今村キリシタンの状況を、詳しくプティジャ
しきょう けいおうにねんじゅうがつしきょうじょかい ほうこく
ン司教(慶応二年十月司教叙階)に報告したのであった。

とくさぶろう いまむら き ふたり てあつ たいぐう ながさき きょうかい み
徳三郎は今村から来た二人のキリシタンを手厚く待遇し、長崎の教会などを見
しか しん う えもん うらかみ おおぜいあつま さか おしえ まな
せた。然し信右衛門は、浦上のキリシタンが大勢集って、盛んに教を学んでい
おどろ だいじ おこ そうい おそ ふつか あと
るのに驚いて、こうしていたら大事が起るに相違ないと恐れて、二日の後には
いまむら かえ い やきち なおしばら とど きょうり けんきゅう せんらい さず
今村に帰って行った。弥吉だけは尚暫く止まって教理を研究し、洗礼を授かつ
いまむら かえ
て今村に帰った。



今村探検については、浦川和三郎「切支丹復活」前篇 396～406 頁、浦川和三郎「浦上切支丹史」110～117 頁参照。

* 4名のその後

・深堀徳三郎

中野郷 乙名 深堀久五郎の子、久五郎は資金を集め居宅前に秘密教会聖フランシスコ・ザビエル堂を建立。

徳三郎は 10 人の神学生とペナン神学校へ留学し、マラリヤに罹り死亡。遺骨が日本へ持ち帰られたかどうかわからない。

墓地：浦上地区には見つからず。

・相川忠右衛門

里郷字土井。旅から帰ってポアリエ(浦上初代の主任司祭)神父と相談して、土井に仮聖堂を建立した。

墓地：経ヶ峰(杉本ゆり/潜伏キリシタン墓碑付近)。

注. 原塚神父(教区引退司祭)は、忠右衛門の子孫(孫?)と聞いている。

・深堀茂一

道上の茂一は、道上の茂市の誤りではないか。

茂市は里郷字道上の茂十郎の子。福山に流されたが、牢を脱出して各地流配者を励ましてまわった。

墓地：経ヶ峰と推定される。

注 1 坂本の深堀泉氏の先組と推定される。

2.1997年(平成9年)の墓石調査当時墓碑名確認できなかった。

- 原田作太郎

上原は、現在の上野1付近。調査するも原田作太郎の情報なし。